

〈論 文〉

日本語の複合動詞と英語の句動詞の対照研究
— 「-上がる」「-上げる」を例に

ローレンス・ニューベリーペイトン¹ (東京外国語大学大学院博士後期課程)

A Comparative Study of Japanese Compound Verbs and English Phrasal Verbs:
the Examples of “-agaru” and “-ageru”

Laurence Newbery-Payton (Doctoral Course, Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード: 複合動詞、句動詞、日本語教育、語彙的アスペクト、状態変化、経路表現

Key words: compound verbs, phrasal verbs, Japanese language education, lexical aspect, change of state, path expressions

要旨: 本稿では「上がる」及び「上げる」を後項動詞とする複合動詞と同様の〈上〉概念を表す不変化詞 **up** を含む句動詞との対応関係を考察し、従来の複合動詞分類の限界を示したうえで再分類を試みる。「-上がる」及び「-上げる」の用法を「状態変化」と「位置変化」に分けることによって、**up** を含む句動詞との対応の有無が説明可能になる。新分類を基に、英語を母語とする日本語学習者向けの教授法改善を検討する。本稿の分析は「-上がる」「-上げる」に限らず日本語の語彙的複合動詞に幅広く応用できる枠組みになると期待される。

Abstract: This paper examines the correspondence between Japanese compound verbs of the form “V1-agaru” and “V1-ageru” and English phrasal verbs containing the particle “up”. Dividing uses of “V1+agaru” and “V1+ageru” into state and path expressions substantially simplifies description of their range of uses as well as elucidating trends in the (lack of) correspondence with English expressions. This novel analysis forms the basis for pedagogical suggestions aimed at addressing difficulties in the acquisition of compound verbs by learners of Japanese whose native language is English

原稿受理日 (2017-10-02)

査読後掲載決定日 (2017-11-07)

日本研究教育年報. 2018, Vol.22, pp53-71. ISSN 2433-8923



¹ 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1. はじめに

本稿では「上がる」及び「上げる」を後項動詞とする複合動詞（以下、「-上がる」「-上げる」）を対象に、1. 日本語における複合動詞と英語における表現の対応関係を明白にすること；2. 従来の複合動詞分類を批判的に考察して再分類を試みること；3. 英語を母語とする日本語学習者向けの複合動詞教授法を提案することを目的とする。本動詞としての「上がる」「上げる」は英語の不変化詞 *up* と同様に〈上〉を本義とすると考えられるが、「-上がる」「-上げる」を英訳する際、「動詞＋不変化詞 *up*」の構造を有する句動詞（以下、「*up* 句動詞」）に対応しない場合が少なくないことを明白にする。日本語と英語の対応関係を分析したうえで、英語を母語とする日本語学習者向けに複合動詞の再分類及び教授法を提案する。その特徴として、佐野（2017）の示唆を受けて複合動詞の意味用法を「状態変化」と「位置変化」に二分することで、より簡潔な分析の可能性を示す。

本稿は、平成 29 年度から東京外国語大学国際日本研究センターの支援を受けている「多言語による複合動詞翻訳プロジェクト」（以下「本プロジェクト」）の研究成果の一部である。「上がる」「上げる」「込む」「出す」「掛かる」「掛ける」「切る」「抜く」「通す」を後項動詞とするいわゆるアスペクト複合動詞ⁱを英語・韓国語・中国語・ベトナム語・ポーランド語に訳して各言語で対応する表現の実態を追究する取組である。なお、英訳作業は本稿の筆者が担当している。

姫野（1976）は日本語教育の観点から複合動詞を考察しているが、その分類（以下、「姫野分類」）を本プロジェクトの出発点としている。「複合動詞用例データベース」における出現頻度を参考に、姫野分類の各カテゴリを代表すると思われる動詞が翻訳の対象として選択されている。9つの後項動詞で合わせて 130 の複合動詞という比較的小規模のデータではあるが、選択過程を考えると十分な代表性が期待されるⁱⁱ。

本稿が扱う「-上がる」「-上げる」はそれぞれ 14 及び 16 の複合動詞が選択されている。「-上がる」「-上げる」に注目する理由として、その高頻度及び意味用法の多様性、また英語の *up* 句動詞との（外見上の）類似性が挙げられる。*up* は Brinton（1988）が述べているように「アスペクト不変化詞（aspectual particle）ⁱⁱⁱ」の 1 つであり、(1a) で示すように、前項動詞が表す事態が完了したことを表す意味用法が「-上がる」「-上げる」と類似している。日本語と英語で〈上〉の概念を表す要素が完了を表すまで意味が拡張したという共通点がみられるが、後述するように、両者の使用範囲が完全に一致しているわけではなく、学習者の理解のためにはより慎重な記述が必要である。

- (1) a. The lake dried up. (干上がった)
b. He talked on but I was no longer listening. (しゃべり続けた)
c. They worked away for the rest of the night. (働き続けた)
(谷脇・當野 2009 : 321、下線：筆者)

本稿の構成は次の通りである。2 節では姫野分類を概観する。3 節では姫野分類に沿った英訳の分析を行う。4 節では従来の複合動詞分類を考察して「-上がる」「-上げる」の再分類を試みる。5 節では英語母語話者向けの教授法について考える。6 節ではまとめと今後の課題を述べる。

2. 姫野（1976）による「-上がる」「-上げる」の分類

姫野（1976）は「-上がる」「-上げる」をそれぞれ表 1 と表 2 の通りに分類している。姫野分類の特徴は「上昇」を「-上がる」「-上げる」の本義とし、それ以外の意味をその拡張とみなす姿勢であるといえる。表 1、表 2 にあるように、まず「上昇」を取り上げ、次に上下関係に基づく「社会的行為」や「体内の上昇」の下位類を設定する構成である。直接「上昇」と無関係の「完了」や「強調」用法はその後挙げられている。後述するように、この「本義→拡張義」は必ずしも有効な分類方法とは限らない。次節からは表 1、表 2 にある下位類の例を英語に訳した結果を分析する^{iv}。

表 1 「-上がる」複合動詞の下位分類（姫野 1976 : 36 に基づく^v）

「-上がる」の複合動詞	自動詞か他動詞か	意味特徴
ふもとから頂上へ駆け上がる 地面から空に向かって伸び上がる 空中を飛び上がる	自+上がる=自 他+上がる=自	上昇
産物[が]～上がる 料理が出来上がる	自+上がる=自 他+上がる=自	完了・完成
観客が震え上がる	自+上がる=自	強調
相手が付け上がる	他+上がる=自	増長
5. 目上の方が飲食物を召し上がる	他+上がる=他	尊敬語

表 2 「-上げる」複合動詞の下位分類（姫野 1976 : 44 に基づく）

「-上げる」の複合動詞	自動詞か他動詞か	意味特徴
1. 地上から月に向かってロケットを打ち上げる 1 階から 2 回まで荷物を運び上げる	自+上げる=他 他+上げる=他	上昇
2. 社長に用件を申し上げる 農民から米を買い上げる	他+上げる=他	社会的行為
3. 子供がしゃくり上げる	自+上げる=自 他+上げる=他	体内の上昇
4. パンを焼き上げる	他+上げる=自	完了・完成
5. 賊を縛り上げる	他+上げる=他	強調
本を読み上げる 軍隊を引き上げる 人生を歌い上げる	他+上げる=他	その他

3. 「-上がる」「-上げる」と対応する英語表現

本節では up 句動詞との対応の有無を中心に、筆者による複合動詞の英訳を考察する。例文は原則として本プロジェクトのものであるが、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) 及び国立国語研究所の「複合動詞レキシコン」の実例を用いる場合もある。

3.1. 「上昇」を表す「-上がる」「-上げる」

姫野 (1976 : 35) によれば「上がる」の基本義は「下方から上方への移動」であり、これを反映させるためか「上昇」の用法を最初に取り上げている。同様に、「上げる」の基本義を「対象とするものを下方から上方へ移動させること」としている (同上 : 43)。次節から「上昇」「上昇〈抽象化〉」^{vi}「体内の上昇」を順番に考察した後、3.4 節でその他の用法を考察する。

3.1.1. 「上昇」

「上昇」の例は主として空間における上昇を表す。(2) (3) で示すように、これらの動詞は概ね up 句動詞に対応する^{vii}。全ての例文に対して、当該の表現を下線で表示する。

(2) 駆け上がる run up

「彼は3階まで階段を一気に駆け上がった。」

He ran up two flights of stairs in one go.

(3) 持ち上げる lift up

「二人でたんすを持ち上げて隣の部屋に運んだ。」

The two of them lifted up the chest of drawers and moved it into the next room.

up 句動詞で表現不可能なものには、(4) の launch のように「上昇」の意味を既に含意する単純動詞がある。このような動詞に up を付加すると意味の重複が生じるため許容度が下がる。また、(5) の「勝ち上がる」に対応する progress は up によって想定される「上下」ではなく「前後」として捉えられる時間の経過を連想させる。(6) の「繰り上がる」は「上下」と「前後」の両軸の捉え方が可能であり、捉え方によって up の可否が変わってくる。

(4) 打ち上げる launch

「ロケットは種子島の宇宙センターから打ち上げられた。」

The rocket was launched from Tanegashima Space Center.

(5) 勝ち上がる progress

「あのチームは順当にトーナメントを勝ち上がっていった。」

That team progressed through the rounds of the tournament as expected.

(6) 繰り上がる move forward, move up

- a. 「開園時間が1時間繰り上がって8時になった。」

The garden's opening time was brought forward one hour to 8 o'clock.

(左右における「時間の経過」)

- b. 「もし前の人がキャンセルすれば、順番が繰り上がるのでチケットを購入できるかもしれない。」

If the people in front of me cancel then I'll move up the waiting list so I might be able to buy a ticket.

(上下における「上昇」)

3.1.2. 「上昇〈抽象化〉」

(7) (8) で示すように、抽象化した上昇を表す「-上がる」「-上げる」も基本的に up 句動詞に対応する。本稿の調査の範囲で対応しないのは (9) の「立ち上がる」のみである。この場合、単純動詞 recover (「回復する」) が対応するのであるが、get back on one's feet (「転んだときに) 再び立ち上がる」という慣用句の存在からもわかるように、英語に「回復」と〈上〉が無関係の概念なのではなく、単純動詞の存在によって複合動詞との直接的な対応が見られないと考えたほうが適切だろう。

(7) 盛り上がる liven up

- 「ビンゴゲームが始まると、パーティーはとても盛り上がった。」

When the bingo game began, the party really livened up.

(8) 持ち上げる big up (俗語^{viii})

- 「マスメディアはあのタレントをさかんに持ち上げているが、本当に実力があるとは思えない。」

The media are heaping praise on that celebrity, but I don't think they have any real talent.

(9) 立ち上がる recover

- 「住民たちはあの大地震から立ち上がった。」

The residents recovered from the earthquake.

また、(7) の例文で「盛り上がる」と liven up が対応しているが、「脚の筋肉が盛り上がっている」といった状態を描写する表現になると be bulging のように「be 動詞+形容詞」で表現されることが多い。すなわち、複合動詞及び句動詞は多義性を有するため対応関係は

正確には意味用法のレベルにある（5 節も参照）。また、(8) のように、1 対 1 の対応が認められる例でも、特定の文脈においては他の表現が用いられることが少なくない。本稿では、学習者のためにはある程度の一般化が必要と考え、(8) のようにある程度の対応が認められた場合、そこに対応関係があるとする。

3.1.3. 「体内の上昇」

「上昇」と「上昇〈抽象化〉」と異なって「体内の上昇」を表す複合動詞は幅広い英語表現に訳される。up 句動詞に対応するもの (10) や単純動詞に対応するもの (11)、動詞の形態を副詞で表すもの (12) などがある。同じ「泣く」行為でも、生理的な感覚として「込み上げる」は涙が目により上昇するように捉えやすいが、「すすり上げる」や「しゃくり上げる」は泣く行為に伴う音を重視しやすいという違いが up 句動詞の許容度に影響している可能性がある。

(10) 込み上げる well up

「彼女は、映画のラストシーンで涙が込み上げてきた。」

Tears welled up in her eyes during the last scene of the film.

(11) すすり上げる sob, sniffle

「着物のそでで涙をぬぐい、喜助は涙をすすりあげた。」

Yoshisuke wiped his tears on his sleeve and gave a sob.

(BCCWJ_PB2n_00162、英訳：筆者)

(12) しゃくり上げる sob convulsively

「普通に観てたんですが、観れば観るほどに泣けてきて最後までしゃくりあげてしまいました」

I was just watching it, but the longer I watched the more I felt like crying and I was sobbing until the very end.

(BCCWJ_OC01_07328、英訳：筆者)

3.1 節では「-上がる」「-上げる」の「上昇」にかかわる用法とその英訳を比較したが、up 句動詞は「-上がる」「-上げる」と比べ使用範囲が狭いことが判明された。次節では「上昇」の概念を離れた「完了」の意味用法を考察するが、「完了」においては「-上がる」「-上げる」と up 句動詞との対応関係は「上昇」のそれより不完全なものであることを示す。

3.2. 「完了・完成」を表す「-上がる」「-上げる」

姫野 (1976) は「完了・完成」(以下、「完了」と略す) の用法を 4 分類している。表 3 で 4 つの下位分類の動詞の例と対応する英語の形式を示す。「作業の完了」を表す「-上がる」

の場合、up 句動詞の使用は不可能であり、動作の結果状態を形容詞で表す傾向がある。ready や finished は動作の様態に言及していないが、名詞の語彙的意味から完了した動作の性質を推測することができる。例えば、the bread is ready では、「パン」は「焼きあがった」または「腫れ上がった」と容易に推測できる^{ix}。

表 3 姫野分類における「完了」と up 句動詞の対応関係

下位分類	対応する例	対応しない例
作業の完了 (上がる)	なし	[be+形容詞] 炊き上がる be ready 出来上がる be finished, be ready ゆで上がる be completely boiled (パンが) 焼き上がる be baked, be ready 編み上がる be finished 仕上がる be finished
自然現象の完了 (上がる)	晴れ上がる clear up 干上がる dry up 涸れ上がる dry up	[動詞+副詞] 澄み上がる clear completely
完成品を伴う 作業の完了 (上げる)	(焼き上げる bake up) (ゆで上げる boil up)	[単純動詞][アスペクト動詞+動詞]など 作り上げる make 縫い上げる finish sewing 焼き上げる bake, finish baking ゆで上げる boil (until ready)
それ以外の 作業の完了 (上げる)	数え上げる count up, enumerate 売り上げる sell up (cf. sell out)	[動詞+副詞][単純動詞]など 調べ上げる investigate exhaustively 並べ上げる list 勤め上げる work until (retirement/the end of one's term)

「自然現象の完了」を表す「-上がる」は概ね up 句動詞に対応し、やや例外的にみえる（ただし「澄み上がる」は対応する up 句動詞はない）。ほとんど対応していない「完了」のなかなか「自然現象の完了」だけが up 句動詞で表現されるのかが興味深い。clear や dry は形容詞派生動詞であるが、形容詞が「晴れている↔曇っている」や「濡れている↔涸れている」といったスケールを含意しているとすれば、up は「100%晴れている」や「100%涸れている」といった上限に至った状態を表しているといえる。この「スケールにおける上限」は不変化詞の使用を許容している可能性がある。

「完成品を伴う作業の完了」を表す「-上げる」の場合、英語では完成品の出現に言及することによって動作の完了が含意されるため、その他の手段を以て事態の完了を表す必要はない。動作が終了したことを特に強調する場合にはアスペクト動詞× finish などが用いられる。なお「縫い上げる」に形態的に対応する sew up は異なる意味（「縫い合わせる」）を表しているが、そのような場合には「完了」を表すのにアスペクト動詞を用いるしかない。

「それ以外の作業の完了」の「-上げる」は「完了」の下位分類の中で最も複雑な対応関係をなしているようである。つまり、up 句動詞が対応するかしないかは各動詞で決まるようである。「数え上げる」と「並べ上げる」は意味が類似しているにもかかわらず、前者が

up 句動詞に対応し後者が up 句動詞に対応しない。up 句動詞に対応しない複合動詞は副詞の付加（「調べ上げる」investigate exhaustively）や単純動詞の使用（「並べ上げる」list）によって表現される。「勤め上げる」は「勝ち上がる」及び「繰り上がる」と同様に、時間の経過という概念を有しているため「上昇」としては捉えがたい。

まとめると、「完了」を表す「-上がる」「-上げる」は up 句動詞との対応が全体的に少ない。幅広く up 句動詞に対応するのは「自然現象の完了」の「-上がる」のみである。「それ以外の作業の完了」の「-上げる」は一部対応する動詞もあるが、本質的な対応関係であるとは言いがたい。日本語の表現からみた限り、英語は日本語ほど〈上〉の概念と完了の意味が生産的に結びついていないように思われる。

以上の結論を裏付けるために「刈り上げる」と「剃り上げる」を考察しておく^{xi}。これらは「上昇」の意味と「完了」の意味を持ち合わせていると考えられるが（13）（14）で示すように「上昇」の意味を表す場合（13）up 句動詞に一部対応している一方、「完了」の意味を表す場合（14）専らその他の形式が用いられる^{xii}。この対で日本語と英語の差異が確認できる。つまり、「刈る」及び「剃る」に関しても up は「完了」を表すまでその意味が拡張していないため、単純動詞や結果構文が用いられる。もし（13）のように up (wards) を付加すれば、「上昇」の意味が優先され「完了」の解釈ができなくなる。

（13）刈り上げる・剃り上げる（「上昇」の意味）trim; shave up (wards)

（14）刈り上げる・剃り上げる（「完了」の意味）mow; shave off, shave clean

本節では「完了」の意味用法を考察したが、「上昇」の意味が希薄化するにつれて up 句動詞との対応が困難になることが示唆された。同様のことが次節の「強調」についてもいえる。また、「完了」と「強調」には深い関係があると思われるが、詳細は次節で述べる。

3.3. 「強調」を表す「-上がる」「-上げる」

姫野（1976）による「強調」の例のうち再分類すべきと思われる動詞がある。（15）の「縛り上げる」が「（人を）動けないようにしっかりと縛る」こと（本プロジェクトで用いる定義）を意味するとすれば、これは「縛る」行為が完了したという意味になるはずである。したがって「縛り上げる」は「完了」に再分類できるといえる。また、姫野（1976）は（16）の「ひねり上げる」を「強調」の例とみなしているが、「上昇」に他ないだろう。

（15）縛り上げる tie up

「強盗は警備員をロープで縛り上げて、金品を奪って逃げた。」

The robber tied up the security guard with a rope and escaped with the valuables.

(16) ひねり上げる twist up

「なんと、男が女の腕をひねりあげて、私の仕事場の向かいのアパートに引きずってゆく。」

Then, would you believe it, the man wrenched up the woman's arm and pulled her towards the apartment opposite where I work.

(BCCWJ_LBg9_00141、英訳:筆者)

(15) (16) は up 句動詞になれるが、以上の理由でそれらを除けば「強調」の例として残るのは (17) (18) である。どちらも句動詞には対応せず副詞で表現する必要がある^{xiii}。

(17) ほめ上げる praise profusely

「社長は優秀なスタッフを誉め上げた。」

The company president showered the excellent staff with praise.

国立研究所 (2015)

(18) 震え上がる shake wildly

「一歩外に出ると、あまりの寒さに震えあがった。」

I took one step outside and shook from the sheer cold.

上述の考察をふまえて、「強調」を表す「-上がる」「-上げる」は句動詞に対応しにくいと一般化できると考えられる。また、「強調」の例と前節の「それ以外の作業の完了」の例を比較すると、「調べる」「並べる」「勤める」などは終結点が比較的に想定しやすい(有界の名詞句と組み合わさって達成動詞(句)になれる)ため「-上げる」は「完了」のような意味をもつ。それに対して「ほめる」「震える」などは終結点が含意されない活動動詞であるため、「-上げる」は「完了」ではなく「強調」の意味を表すと考えられる。もしそうであるとすれば、「完了」及び「強調」の意味用法における「-上げる」「-上がる」そのものが表すのは「高程度」とでも呼ぶべき意味であって、複合動詞全体における意味は前項動詞の語彙的性質に従う、という解釈が可能である(Bolinger (1971: 99-101) が指摘する up の「高強度を表すパーフェクトの意味」を参照)。「完了」と「強調」の関係は第 4 節で改めて考察するが、まず姫野分類の検討を進めることにする。

3.4. 「増長」「尊敬語」「社会的行為」を表す「-上がる」「-上げる」

本節では「上昇」「完了」「強調」以外のカテゴリをまとめて検討する。姫野(1976)は「付け上がる」及び「思い上がる」のために「増長」というカテゴリを設定しているが、どちらも「上昇」の中の「地位の上昇」^{xiv}あるいは「強調」や「社会的行為」のいずれかとみなせるはずなので「増長」を設定する必要性が不明である。(19)には俗語ではあるが、対応する up 句動詞が存在している。また、「召し上がる」などの「尊敬語」は「社会的行

為」に含めてもよいだろう。(20) (21) のような「社会行為」の例は概ね英語の単純動詞に対応する。各言語にそれぞれ特有の文化的、社会的側面があるとすれば、通言語的概念と思われる「上昇」や「完了」と比べ、社会的な行為の捉え方が各言語で異なっても不思議ではない。

(19) 付け上がる big oneself up (俗語)、be presumptuous

「彼は、こちらが下手に出ると、ますます付け上がるから、一度厳しく注意したほうがいい。」

When we take a conciliatory tone he gets more and more presumptuous, so it would be a good idea to give him a serious warning.

(20) 巻き上げる swindle

「多くの投資者をだまして金を巻き上げていた男が逮捕された。」

A man who swindled many investors out of their money has been arrested.

(21) 申し上げる state, express

「心からお礼を申し上げます。」

Please allow me to express my deepest thanks.

4. 考察

第3節では「-上がる」「-上げる」とその英訳の比較対照を通じて、英語の up 句動詞などとの対応関係が見えてきた。第4節では複合動詞に対する従来の見解を考慮しながら、英語を母語とする日本語学習者により理解しやすい「-上がる」「-上げる」の再分類を試みる。

4.1. 日英対照の結果

本節ではまず翻訳調査の結果をまとめる。姫野分類に沿った「-上がる」「-上げる」と英語表現の対応関係を表4及び表5で示す^{xv}。「英語の形式」欄には一般化を重視し、最も典型的と思われる形式を表示している。例えば、表4の「自然現象の完了」ではほとんどの複合動詞が up 句動詞に対応するため「up 句動詞等」と記述している（対象の動詞が増えると形式の多様性も増える可能性がある）。

表 4 姫野分類に沿った「-上がる」の用法と対応する英語の形式

大分類	中分類	小分類	複合動詞例	対応する英語	英語の形式
上昇	全体的 上昇	空間的上昇	駆け上がる、 持ち上がる等	run up, rise up	up 句動詞
		序列の上昇	繰り上がるのみ	move forward, move up	up 句動詞等
		地位の上昇	のし上がる、 勝ち上がる等	rise, progress	単純動詞
	部分的 上昇	形の伸長	起き上がる、 立ち上がる等	stand up	up 句動詞
		形の縮小	巻き上がる、 めくれ上がる等	wind up, blow up	up 句動詞
		量の減少 による 形の縮小	はげ上がる等	go bald	動詞+形容詞
完了・完成	作業活動の完了		焼き上がる、 炊き上がる等	be baked, be ready	be 動詞 +形容詞
	自然現象の完了		晴れあがる、 澄み上がる等	clear up, clear completely	up 句動詞等
強調			震え上がる、 おびえ上がる等	shake wildly, be terribly scared	動詞+副詞、 be 動詞 +副詞+形容詞
増長			思い上がる、 つけ上がるのみ	be conceited, be presumptuous	be 動詞 +形容詞等
尊敬語			召し上がるのみ	partake (of)	単純動詞

表 4 及び表 5 の傾向をまとめると、up 句動詞と対応しやすい項目は「上昇」の下位分類であるが、「地位の上昇」及び「量の減少による形の縮小」は例外的に対応しにくい項目となっている。up 句動詞に対応しにくい項目は「完了・完成」「強調」「増長」「尊敬語」「社会的行為」「体内の上昇」「その他」である。ただし、「自然現象の完了」は例外的に対応しやすい項目となっている。全体的な（不）対応関係は、up の意味拡張が「-上がる」「-上げる」のそれほど進んでいないことを示唆している。換言すれば、「-上がる」「-上げる」は up と比べ意味の希薄化・文法化が顕著であるといえる。

表5 姫野分類に沿った「-上げる」の用法と対応する英語の形式

大分類	中分類	小分類	複合動詞例	対応する英語	英語の形式
上昇	全体的 上昇	空間的上昇	持ち上げる 打ち上げる	lift up, launch	up 句動詞等
		序列の上昇	繰り上げる 切り上げる	bring forward, round up	up 句動詞等
	部分的 上昇	形の伸長	盛り上げる 積み上げる	heap up, pile up	up 句動詞等
		形の縮小	巻き上げる 折り上げる	wind up, fold up	up 句動詞
		量の減少 による 形の縮小	刈り上げる 剃り上げる	mow, shave	単純動詞等
社会的 行為	下位者から上位者に		申し上げる 願いあげる	state, beg	単純動詞
	上位者から下位者に		巻き上げる 取り上げる	swindle, confiscate	単純動詞
体内の 上昇			込み上げる しゃくりあげる	well up, sob convulsively	up 句動詞等、 動詞+副詞
完了・ 完成	完成品を伴う 作業活動の完了		作り上げる 縫い上げる	make, finish sewing	動詞、 局面動詞+動詞
	作業活動の完了		調べ上げる 数え上げる	research exhaustively, count up	動詞+副詞、 up 句動詞等
強調			ほめ上げる ひねり上げる	praise profusely, twist up	動詞+副詞、 up 句動詞等
その他			読み上げる 引き上げる	read out, finish	句動詞、 単純動詞等

4.2. 従来の複合動詞分類の見直し

分類には不合理な点がみられる。下位分類を設定する意義や個別の複合動詞の分類以外に、より本質的な問題として、姫野分類は対称性に欠けていると思われる。対称性とは何かを、佐野（2017）の提案（以下、「佐野分類」）との対照によって明白にする。

佐野（2017：325）は変化の現象を「位置変化」と「状態変化」に二分できるとしている。典型的な位置変化では変化主体の状態が一定である（例えば、ボールを投げるとき、ボールの形の変化があったとしても注目されない）。一方、典型的な状態変化では変化主体の位置が一定である（例えば、氷が解けるときの、その位置の変化があったとしても注目されない）。佐野（同上）は位置変化と状態変化を言語化するために用いられる表現をそれぞれ「経路表現」と「状態表現」と呼んでいる。この考え方を「-上がる」「-上げる」に当てはめてみると、経路表現は姫野分類の「上昇」及び「上昇（抽象化）」用法に相当し、状態表現は姫野分類におけるそれ以外の意味用法に相当することになる。表6で示すように、「経路表現」が up 句動詞になりやすく「状態表現」は up 句動詞になりにくい^{xvi}。

表 6 佐野分類に沿った「-上がる」「-上げる」と up 句動詞の対応関係

翻訳の難易度	経路表現	状態表現
可	13	14
難	1	4
不可	4	27

佐野分類を考察したうえで姫野分類を再考すると、後者は「位置変化」を全て「上昇」に一括している一方、「状態変化」を上位において細分類している（表 4、表 5 の「姫野大分類」欄を参照）。その結果、「-上がる」「-上げる」の用法が主として「上昇」を表し、その他の用法は互いに類似性もなく周辺的な存在にすぎないかのように捉えられる。なお、姫野分類におけるこのような非対称性は英語との対照によって浮き彫りになったわけであるが、日本語における複合動詞の記述としても問題であることに注意されたい。

本稿は姫野分類の代わりに佐野分類をそのまま導入すればよいと主張しているわけではない。ある文法事項を学習する際に、全体像の説明も個別の用例の説明も必要であると考えられる。佐野分類は「経路表現」及び「状態表現」の二分類を与えることによって「-上がる」「-上げる」の全体像を明白にすることができるが、その抽象度は高く、個別の用例の説明には向いていない。一方、姫野分類は細かいだけに「-上がる」「-上げる」が成す体系が捉えにくい。以下提案する再分類は両分類を取り入れることによって、up 句動詞との対応関係のみならず、「-上がる」「-上げる」そのものの体系をより簡潔に記述することを目的としている。

表 7 で「-上がる」「-上げる」の再分類を示す。上位概念として「位置変化」と「状態変化」を設定することで対称性が得られ、姫野分類における「上昇」の（過剰）重視を回避できる。また、単純ではあるが、「状態変化」を表 7 の上半分に表示することによって「状態変化」への注目を促す。このような表示は英語母語話者の習得には特に重要であると考えられる。すなわち、母語からの類推を用いれば経路表現の「-上がる」「-上げる」は習得が比較的に用意になるはずであるが、up 句動詞で表現しにくい状態表現の習得の場合、母語からの類推を期待できないのである。したがって、「状態変化」を周辺的な用法として取り扱おうと学習者の習得が母語と共通する項目にとどまるおそれがある。

上位概念として「状態変化：高頻度」と「位置変化：上昇」を設定するのは、一見重複のようであるが、「状態変化」と「位置変化」は「-上がる」「-上げる」に限らず、他の複合動詞の記述にも使用可能な概念である。up 句動詞との対応関係は「-上がる」「-上げる」以外に「-出す」や「-込む」など他の動詞を後項動詞とする複合動詞に対応している場合が少なくないが^{xvii}、そのような複雑な対応関係を理解するためには「状態変化」及び「位置変化」のような概念が有効だろう。

「高程度」は 3.3 節で述べた「強調」及び「完了」の上位概念である。この位置づけは学習者に前項動詞の性質（語彙的アスペクトなど）に注目させる試みでもある。また、「位置変化」では姫野分類における「上昇」の下位分類を一部修正している。姫野分類では「上

昇」を「全体的上昇」と「部分的上昇」に分けているが、この区別が学習者にとって有意義なのかは疑問に思われる。表 7 ではまず直感的により理解しやすいと考えられる「具体的上昇」及び「抽象的上昇」に分類にしている。

表 7 の右端の欄には up 句動詞の許容度を可視化するために三段階の色付けをしている。黒い箇所は明白な対応関係がみられる項目である。灰色の箇所は部分的な対応関係がみられる項目である。白い箇所は対応がない、すなわち習得が特に困難と思われる項目である。

表 7 では便宜上、状態表現と経路表現を分けて表示しているが、実際には中間的な用例もある。例えば「木を切り倒す」は位置変化（木を切ることによって移動させる）としても、状態変化（木が立っている状態から倒れている状態へと変化させる）としてもみなせるだろう。この連続性も合わせて学習者に説明する必要がある。

表 7 「-上がる」「-上げる」の再分類^{xviii}

状態 変化： 高程度	強調		震え上がる、 ほめ上げる	shake wildly, praise profusely
	完了	作業の完了 （「-上がる」のみ）	焼き上がる、 ゆで上がる	be baked/be ready, be completely boiled
		自然現象の完了 （「-上がる」のみ）	晴れ上がる、 干上がる	clear up, dry up
		完成品を伴う 作業の完了 （「-上げる」のみ）	作り上げる 縫い上げる ゆで上げる	make finish sewing boil (up) (until ready)
		それ以外の作業の 完了 （「-上げる」のみ）	並べ上げる、 調べ上げる	list, investigate exhaustively
位置 変化： 上昇	具体的 上昇	空間的上昇	駆け上がる、 持ち上げる	run up, lift up
		形の伸長	立ち上がる、 積み上げる	stand up, pile up
		形の縮小	巻き上がる、 折り上げる	wind up, fold up
		量の減少による 形の縮小	はげ上がる 剃り上げる	go bald, shave
	抽象的 上昇	序列の上昇	繰り上がる、 切り上げる	move up/move forward, round up
		社会的行為	思い上がる ^{xix} 、 申し上げる	be conceited, state
		体内の上昇 （「-上げる」のみ）	込み上げる、 しゃくりあげる	well up, sob convulsively
		地位の上昇 （「-上がる」のみ）	のし上がる、 勝ち上がる	rise, progress

佐野分類が妥当であるとすれば、個別の言語における形態論などにとらわれず通言語的に応用して言語対照を行えると考えられる。本プロジェクトの今後の課題として、他の対象言語においても英語と同様の傾向がみられるかどうかを確認する必要がある（張（2017）、崔（2017）などを参照）。個別の言語を超えた共通点、また日本語の特性を見出せるのでは

ないかと期待される。本稿の考察だけでは断言できないが、日本語の特性は複合動詞による状態変化表現の多用にあるという仮説を立てることができる。

表 7 を再考すると、主要部が前項にある複合動詞は概ね状態変化を表し、主要部が後項にある複合動詞は概ね位置変化を表す。その理由は、意味の希薄化の過程を想定すれば説明できる。空間義を失ってアスペクトを表すようになった「-上がる」「-上げる」は、複合語全体の主要部になるだけの具体的な意味を有していない。一方、「上昇」を表す「-上がる」「-上げる」など、前項動詞と後項動詞がいずれも具体的な意味を有している場合、主要部後置型言語である日本語の一般規則に則って後項動詞が主要部になると考えられる。

本節では従来の複合動詞分類の批判的な考察及び佐野（2017）に基づく「-上がる」「-上げる」の再分類を試みた。この新しい分類は学習者にとってより理解しやすいと期待されるが、次節では教授法について考察する。

5. 複合動詞の教授法について

本節では上記の分析結果を踏まえて英語母語話者にとってわかりやすい複合動詞の教授法を検討する。

現代英語では句動詞を用いるか同様の意味を持つ単純動詞を用いるかはレジスターの問題であり、句動詞は基本的に口語で用いられる。例えば、「数え上げる」を意味する count up と enumerate とでは、前者がよりくだけた表現である。また、英語では生産動詞などに不変化詞を付与するのは通常任意の運用であり、付与することで有標な表現になるが、日本語では後項動詞が動作の完了を示す働きをしている^{xx}。

それでは、英語母語話者向けにはどのような複合動詞教授法が適切なのだろうか。まず、「上」を漢字で表記することによって、学習者が誤解することは容易に想定できる。「上」はその一字で意味をなし、初級段階でも習得されるため、「-出す」や「-込む」などよりも漢字の本来的な意味すなわち「上昇」にとらわれやすいのではないと思われる。そうすると、「-上がる」「-上げる」の全ての用法に対して〈上〉という概念への執着が理解を阻害する恐れがある。仮名表記を用いれば経路表現と状態表現を同等に捉えやすくなると考えられる。

表 3 などでも示したように、up にも「-上がる」「-上げる」と類似した用法があるが、学習者に up のもはや「上昇」とはいえない用法を意識させたいので複合動詞の教授を行うと「-上がる」「-上げる」の習得が早まるだろう。例えば、「完了」の場合、clear up や dry up における up は何を表しているかを考えると、対応する「晴れ上がる」「干上がる」における「上がる」の役割が理解しやすくなるはずである。

英語にみられない「強調」の例は「晴れ上がる」「干上がる」の延長線として説明できる。縦軸の「程度」を想像すれば「気温」や「標高」のように、「震えること」や「ほめること」をスケールとして捉え、それが極端に至ったことを示す「-上がる」「-上げる」の働きに注目する教授法である。「もうこれ以上の晴れはないほどに晴れること」が「晴れ上がる」で

あると同様に、「もうこれ以上震えられないほどに震えること」や「もうこれ以上ほめることができないほどほめること」がそれぞれ「震え上がる」「ほめ上げる」なのである。このように、日英共通の用法を通して英語にはない用法をより直感的に説明できると考えられる。

本稿の考察を基に、教育現場で活かせるような基礎資料の作成を予定しているが、表 8 でその抜粋を示す。学習者向けには、状態表現と経路表現という全体の位置づけと同時に、表 7 で取り上げなかった各複合動詞の多義性も考慮する必要がある。各項目には、①見出し語、②典型的な主語や目的語、③日本語における概念化の直訳（“”で囲む）、④自然な英語訳、⑤英語において③と同様の概念化によって形成されられると思われる表現（ある場合のみ）、⑥間違いやすいと思われる関連項目（ある場合のみ）という情報を含めている（応用の際、番号を削除する）。

表 8 では、灰色の箇所は各動詞が有する多義性の範囲を可視化している。前節で述べたように、経路表現と状態表現を完全に分類するのは非現実的であるため、「用法」欄では、あえて「経路」と「状態」を縦線で分けていない。専ら経路表現になる「駆け上がる」、経路表現と状態表現の両方を表せる「立ち上がる」、専ら状態表現になる「震え上げる」を例として示している。表 8 が基となる基礎資料の完成及びその効果の実証は今後の課題になる。

表 8 「-あがる」「-あげる」の一覧表（抜粋）

複合動詞	用法 経路	状態	備考	注意事項
①駆けあがる ③“run up”	②（階段を） ④run up			
①立ちあがる ③“stand up”	②（いすから） ④stand up	②（地震から） ④recover ; ②（パソコンが） ④start up		
①震えあげる ③“shake up”		②（人が） ④shake wildly	⑤c.f. hurry up	⑥shake up= （人を）困惑させる ; （制度を）改革する

6. まとめと今後の課題

本稿では「-上がる」「-上げる」を後項とする複合動詞と対応する英語表現を、up 句動詞との対応の有無を中心に考察した。「-上がる」「-上げる」の意味用法のうち、その「上昇」の意味が up 句動詞で表しやすく、「完了」や「強調」などになると表しにくくなる傾向を考察した。また、従来の複合動詞分類の不十分な点を指摘したうえで、佐野（2017）の提案に基づいて「-上がる」「-上げる」の新しい分類を試みた。up 句動詞との対応がとりわけ不完全なのは「状態表現」の場合であり、「状態変化」を表す「-上がる」「-上げる」の意味用法の習得が複合動詞の教授法において特に取り組むべき課題の一つであることを指摘した。本稿がその目標に向けての基礎研究になると期待される。

本稿で提案した分類は「-上がる」「-上げる」のみならず、**up** が部分的に対応している「-出す」や「-込む」にも通用するものと考えられる。本来、同様の〈上〉という概念を共有する語彙が複合語で現れたとき際に対応しないことを考えると、同様の不对応関係が「-出す」と **out** や「-込む」と **in** の間にもみられる可能性が高い。複数の後項動詞及び不変化詞を考察することによって、より総合的な対応関係が記述できると期待される。日本語と英語における語彙的アスペクト体系の記述の精密化が今後の大きな研究課題となるだろう。

本稿は「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育第一回研究会」で行われた口頭発表の内容を大幅に修正・増補したものである。

参考文献

- 赤野一郎他編 (2015) 『最新英語学・言語学辞典』 開拓社
- 青柳宏・張楠 (2014) 「中国語と日本語の結果複合動詞について」岸本秀樹・湯本陽子編『複
雑述語研究の現在』ひつじ書房 411-437
- バーナード・クリストファ (2002) 『英語句動詞文例辞典：前置詞・副詞分類』 研究社
- Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*. Cambridge: Harvard University Press.
- Brinton, L. (1988) *The Development of English Aspectual systems*. Cambridge: Cambridge
University Press
- 張正 (2017) 「中国語からみた日本語の複合動詞〈～あがる／～あげる〉」『多言語からみた日
本語複合動詞と日本語教育第一回研究会』2017.6.17 予稿集 25-35
- Dehé, N. et al. (eds.) (2002) *Verb-Particle Explorations*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Gorlach, M. (2004) *Phrasal constructions and resultativeness in English: a sign-orientated analysis*.
Amsterdam: John Benjamins.
- 姫野昌子 (1976) 「「～あがる」、「～あげる」および下降を表す複合動詞類」『日本語学校論
集』3 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校 91-122 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の
構造と意味用法』ひつじ書房 35-57
- 影山太郎編 (2009) 『日英対照形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎編 (2013) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』ひつじ書房
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解
明に向けて』ひつじ書房 3-46
- 岸本秀樹・湯本陽子編 (2014) 『複雑述語研究の現在』ひつじ書房
- 松田文子 (2002) 「複合動詞研究の外観とその展望：日本語教育の視点からの考察」『言語
文化と日本語教育』5 お茶の水女子大学 170-184
- 望月圭子・申亜敏 (2009) 「中国語の結果複合動詞—日本語の結果複合動詞と英語の結果構
文との比較から」小野尚之編『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房 407-450
- Moehle, A. M. (2016) *A Contrastive Study of Japanese Compound Verbs and English Phrasal Verbs*:

Building Toward a Typology of Linguistic Construal Operations Involved in Processes of Semantic Extension. 博士論文：大阪大学

ニューベリーペイトン・ローレンス (2017) 「日本語の複合動詞「-上げる」「-上がる」—英語との対照から」『多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育第一回研究会』2017.6.17 予稿集 85-98

奥津敬一郎 (1983) 『「ボクアハウナギダ」の文法:ダとノ第4版 (増補)』くろしお出版

小野尚之編 (2009) 『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房

大谷直輝 (2008) 「英語の不変化詞が表す主観的意味について—有界性と価値付与を中心に」山梨正明他編『認知言語学論考』8 ひつじ書房 191-226

大谷直輝 (2013) 「不変化詞の完了用法の参与者志向性について」児玉一宏・小山哲春編『言語の創発と身体性 山梨正明教授退官記念論文集』ひつじ書房 479-492

Otani, N. (2013) *A Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions: From Spatial Senses to Grammatical and Discourse Functions*. Tokyo: Kaitakusha.

崔正熙 (2017) 「韓国語と日本語の複合動詞について—完了相の「～NAYTA」と始動相の「～出す」を中心に」東京外国語大学国際日本研究センター2017 年サマースクール研究発表会資料

佐野洋 (2017) 「時間経過の見方の二重性と言語表現」Japio YEAR BOOK 2017 日本特許情報機構 322-331

谷脇康子・當野能之 (2009) 「句動詞—動詞と小辞の組み合わせ」影山太郎編『日英対照形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店 293-324

湯本陽子・岸本秀樹編 (2009) 『語彙の意味と文法』くろしお出版

コーパス・オンライン資料

国立国語研究所 (2009) 「コーパス開発センター 現代日本語書き言葉均衡コーパス」参照先: http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

国立国語研究所 (2015) 「複合動詞レキシコン」 参照先: <http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>

国立国語研究所 (2017) 「複合動詞用例データベース」 参照先: <http://csd.ninjal.ac.jp/comp/>

註

i 本稿でいうアスペクト複合動詞とは、従来の見解のアスペクト (事態の開始、継続、終了などの時間的展開) という意味を表す複合動詞のことである。この種の複合動詞は習得が特に困難と考えられる項目である。

ii 後述するように、本稿で取り扱うデータでも示唆的な結果が得られた。今後の課題としてより大規模なデータを用いた考察が当然望まれる。

iii 本稿では大谷 (2008, 2013) に従い、「不変化詞」と訳す。

iv 本稿では自他の問題は主眼ではないため「-上がる」「-上げる」を一括して考察することもある。

v 本稿では一律に漢字表記を用いている。ただし、5 節の表 8 では仮名表記を用いている。

vi 「上昇 (抽象化)」は姫野分類にない、本プロジェクトのために追加された下位分類である。

vii 複合動詞一語の翻訳に加えて当該の複合動詞を用いた例文も翻訳されている。それぞれの場面で最も自然な英訳を選択しているため両者が一致しない場合もあることを断っておく。

- viii 句動詞は従来、口語とみなされてきたが、(8) は俗語の響きが特に強く感じられる。
- ix 「作業の完了」を表す「-上がる」と対応関係が全くみられないのは、英語に脱使役化が起こらないことに由来していると思われる。詳細は申・望月 (2009:420) を参照されたい。
- x 「アスペクト動詞」は赤野他編 (2015) の用語である。
- xi 姫野 (1976) はこれらの動詞を「部分的上昇」における「量の減少による形の縮小」に分類している。
- xii (14) の shave off 及び shave clean は結果構文であるが、句動詞と結果構文の関係については Otani (2013) を参照されたい。
- xiii 同類の「おだて上げる」は butter up に訳できるが、これはかなり砕けた表現であり、同じ意味の単純動詞 flatter も存在している。
- xiv 姫野 (1976) は「のし上がる」や「勝ち上がる」を「地位の上昇」を表す複合動詞としている。本稿では、「上昇」の複合動詞のほとんどが up 句動詞に対応することから、姫野分類における「上昇」の下位分類まで細かく検討しないことにしているが、4 節の表 4、表 5 では姫野分類の全体像を示す。
- xv ただし、今回の調査は姫野 (1976) にある全ての複合動詞を網羅的に記述したものではないことを断っておく。翻訳対象及び本稿の分析対象となった動詞は、姫野 (同上) が挙げている動詞の中から本プロジェクトにかかわる日本語母語話者が「複合動詞用例データベース」における出現頻度を基に代表的と判断した動詞である (第 1 章も参照)。
- xvi 表 6 には翻訳対象外の複合動詞も含まれているため、表 6 の合計は 2 節で述べた 30 とは一致しない。
- xvii バーナード (2002) の例を挙げる：
- (i) bring up 「(論拠・話題・案などを) 持ち出す」、call up 「...をデータから呼び出す」、cough up 「咳をして (痰・血などを) 吐き出す」、dig up 「...を掘り出す」、think up 「(口実・計画などを) 考え出す」
- (ii) clam up 「黙り込む」、dress up 「めかしこむ」、muffle up 「(～を防いで) ...を着こむ」、mug up 「(一夜漬けで) ...を詰め込む」、pipe up 「(急にしゃべり出して) 話に割り込む」
- xviii 下位分類の名称は、姫野分類との比較を容易にするため本稿では基本的に変更していないが、最終的には姫野分類の用語に断る必要はないだろう。
- xix 「増長」をなくして「思い上がる」などを「社会的行為」に含めている。
- xx Gorlach (2004) によれば、英語では「単純動詞」→「動詞+不変化詞+名詞」→「動詞+名詞+不変化詞」の順番で、事象が完了したこと (resultativity) が強調されていく。